

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River

ヨ

シノボリという魚を最近ほとんど見なくなりまして、河川改修が盛んに行なわれる前までは菊池川水系の至る所に生息していました。石垣でウナギの穴釣りをしている時に一番にミミズに集まってくるのがこのシノボリでした。このあたりではサラモチ、スイツキドンコなどと言われますが、熊本の江津湖付近ではドンコのドンカツチョに対してシノボリはイシカツチョと言われている。分類学上はスズキ目ハゼ亜目ハゼ科シノボリ属となっていますが、このシノボリ属には似たような種類が何種類かあって菊池川水系のシノボリがどの種に属するかよくわかりません。十町川のはおそらくカワヨシノボリではないかと考えています。北海道、本州、四国、九州、五島列島、琉球列島に分布していますが類似種が多くシマヨシノボリ、クロヨシノボリ、オオヨシノボリ、ルリヨシノボリ、トウヨシノボリなど現在のところ13種類に分類してあるようです。生態の体長は6〜7センチ前後で体の模様はいろいろあります。いずれも目から鼻にかけて赤い線が数本あります。サラモチ、スイツキドンコなどの名前の由来からして腹側に吸盤を持つているのが特徴です。垂直に立った壁のような岩や堰で水の流れの速いところや、ちよつと濡れた程度のところも吸盤を利用して遡上することが出来ます。吸盤は左右の腹鰭が寄り合って変化してできたものです。

食性は稚魚の時は川底の藻類やプランクトンを食べるが、成魚になるとウナギ釣りの邪魔をしに来るくらいだから食欲極まりないずうずうしさがあります。主に肉食でミミズ、エビ、小魚の卵など大きな口を開けてひと呑みします。自分の体の半分ぐらいの大きさまで呑み込んでしまします。雄は繁殖期になると縄張りを作り、近づいてくる雄を激しく攻撃する一方で石の下を砂を掘って巣穴を作り雌を迎え入れて産卵させます。産卵後雌は雌を追い出して卵が孵化するまで守ります。孵化した稚魚は海に降り、海で成長し再び川を遡上するのですが十町川や和仁川に居るカワヨシノボリは降河せず一生を河で過ごします。海の代わりにダムや湖で成長するものもいます。私が子供の頃、夏休みに竜門橋の上の砂地辺りで泳いだりして遊んでいた頃小さい魚（体長90ミリくらい）が幅20センチくらいの縦列になって岸近くの浅い所を、ピヨツ・ピヨツ・ピヨツ・ピヨツ・ピヨツと皆見事に歩調を合わせて川上に向かって移動していく姿を何度も見たことがあります。何という魚かもわからず、ただ不思議そうにいつまでも眺めていたことを思い出します。その行列がどこまで続いているのか確かめようと思つて上流、下流へ辿つて行つたのですが、何処までも何処までも延々と続いているので子どもの私には遂に上下の端をつきとめることはできませんでした。その列を崩してみようと思つて1メートル程掻き回して

列を乱してもチリジリに離散したはずのものがいつの間にか何事もなかったかのように元の状態に戻っているのです。当時どなたに聞いてもこの行列について説明してくれる人がいませんでした。今思うと、これが海から続いたトウヨシノボリかルリヨシノボリなどの稚魚の遡上ではないかと勝手に考えているところですが、本当のことは専門家の人に聞いてみなければ分かりません。地域によってはこの行列を網を使って捕獲し食用にされているそうですが大変美味であるということです。私達に一番身近な川魚の一つが菊池川水系から姿を消していくのは大変寂しいことです。

今回水援隊員の江田在住の「上村博」さんが江田川中流域より貴重なヨシノボリを捕獲され支所水槽で飼っています。興味のある人は一度ご覧下さい。



歴史調査の楽しみ方

日平城跡 19

東町の山北地区を向いている南西側派生尾根の測量が終わりました。地域ごとに、測量図が完成していくのは、嬉しいものです。今回は、この尾根の先端部を説明します。

小山の上面は、長さ16・5m、最大幅13mの平場になっていました。丁寧に造成されており、中心域を標高251・5mの等高線が巡ります。先月号でも述べましたが、城山②の山頂と全く同じ造りです。かなり離れています。両者は、同時期に城造りされた事が分かります。

小山の北東下には、堀切が残っています。緩傾斜地の南西側派生尾根と小山の境目を断ち切っています。地形の変化点で、尾根が最も低くなる所です。その地形を利用した堀切で、この箇所が、さらに掘り下げられています。

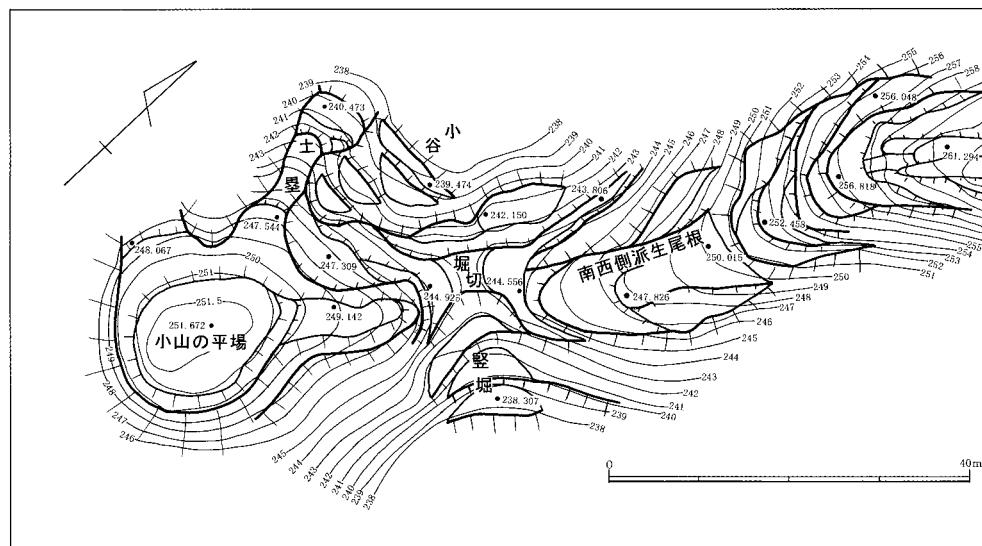
堀幅は、長さ3m、幅4mで、堀底と小山とは7・7mの高低差があります。この堀切は、東側斜面がセオリー通りに堅堀に変化しています。この堀切で特筆すべき事は、西側

斜面にあります。小山の北側を下る小谷が、堀切の西側斜面を、完全に吸収しているからです。さらに、この小谷には、細工がされています。西側肩部は、縁部が削り落されて、土塁に仕上げられているのです。幅3・7m、長さ17m分が、綺麗に残っています。この様に、南西派生尾根の先端部は、非常に、手の込んだ造りになっている事が分かります。でも不思議な事は、この小山に手を加えても、どれだけ防禦効果があるかという事です。これは分かりません。大学時代から山城の研究が続けていますが、永遠の謎です。よく言われる事ですが、城造りは、最大の軍事機密でした。そのために、関係書類や図面が残っていません。実際、初期の江戸幕府は、支配体制を固める手段として、諸藩に城絵図の提出を命じています。それくらい大事なもの。ですから、戦国時代の城絵図などは、まず、残っていないのです。時期が来れば、その都度、破棄されていったのでしょう。それで、現代に生きる我々は、城跡を丹

念に測量して、城の縄張りを推測するしか、アプローチの方法が無いのです。まして、地形を局部的に見て、縄張りの効果が、いかなものかという推論は、余り根拠の無いものになります。

でも、あたり前の事ですが、どうも、教科書みたいなものがあるって、「こんな地形には、この様に手を加えなければならぬ」と決まりがあったみたい。その証拠に、長年、山城調査をしていると、地形を見て、大方の遺構が分かる様になりました。中には、大して、効果が無いと思える個所にも、手が加えられている場合もあります。教科書通りの造りの弊害でしょう。

そして、城造りには、美的効果も求められるのではないかとこの事も分かっています。城の威厳を他に知らしめるためです。そうとしか考えられないケースがあります。日平城跡の調査も、いよいよ



日平城跡 南西側派生尾根 先端部

よ、正念場を迎えました。西側尾根の調査に入ります。城跡にも、3度目の梅雨の季節が巡ってきました。

大田 幸博

(元・菊水町史編纂委員会副委員長)